

三好達治「乳母車」論

——夕暮れと郷愁——

一

三好達治の「乳母車」は、大正十五年六月の「青空」(第二巻第六号)に発表された作品である。雑誌「青空」は、大正十四年一月に創刊され、昭和二年六月に終刊となった同人雑誌で、大正十四年八月の「青空」(第一巻第六号)の「雜記」は、「『青空』は、東大に居る、旧三高劇研究会のメンバーから出来たと云つて差支あるまい」と紹介している。また、紅野敏郎は、同誌の性格について「『青空』は最初からひとつの文学運動の拠点になるといふあらゆる意図でもつて創刊されたのではないようだ。第一号には、とりたてて壮大な創刊のことばもなければ、ういいういしくはずんだような同人雑誌すら見うけられない。あえて気負つた姿勢をば、空疎なことばで見せていくことに著しく潔癖なのである。あくまでも、三高か

元 木 直 子

ら東大にすすんだものの自由な集まりの場だったのである」⁽¹⁾と述べている。また、中谷孝雄が、「すつと後になつて名作の評判の高くなつた梶井の『檸檬』が出てゐるにも関わらず、『青空』の創刊号はなんの反響も呼ばなかつたことである。中谷の『初歩』や外村の『母の子ら』はいふにたりないにしても、梶井の『檸檬』までが当時のすべての読者から黙殺されてしまつたのであつた」⁽²⁾というように創刊当時の「青空」の位置は低かつた。

三好達治が「青空」に加わつたのは、大正十五年の四月のことである。中谷孝雄は、「四月になると浅沼喜実、北神正、淀野隆三⁽³⁾、三好達治の四人が東大へ進学し、浅沼と淀野とは直ちに『青空』に参加した。かうして同人は七人になつたが、四月中は何かとあわただしく、原稿も集まりにくかつたので、もうひと月復刊を延期して、六月号から再発することにした」⁽⁴⁾と述べており、三好が実際に同

人として名を連ねるようになったのは、作品を掲載した大正十五年六月からである。これは中谷孝雄のいう「再出発」の号にあたる。⁽⁵⁾

三好達治が初めて「青空」に掲載した作品は、「玻璃盤の嬰兒」

「祖母」「短唱」「魚」「乳母車」の五作品である。以後、大正十五年

十一月号を除き、昭和二年六月号の終刊まで掲載は続いていく。三

好達治の作品について、中谷孝雄は「三好君の印象」のなかで「今

後、ひき続き発表される彼の詩は、青空の内容を益々豊富にする事

と思ふ⁽⁶⁾」と大きな期待を寄せている。三好達治は、「青空」に発表

した作品について、「さて私は高等学校の三年間、詩作に夢中にな

りながら、漸くその卒業間際に、『玻璃盤の嬰兒』と題する、あま

り上出来でもない一篇の詩を書き得た外、何らの収穫をも得ないで

しまった。(中略)さてその後、私は間もなく、その頃私の友人達

が出してゐた雑誌『青空』に、同人として加入した。やうやく書き

ためた数篇の詩を「纏めに発表すると、私は軽い気持になつた⁽⁷⁾」と

述べていることから、「玻璃盤の嬰兒」が、高校時代に書かれた唯

一の作品であり、他の四作品は、東大入学後に書かれたものである

う。すなわち、処女作ともいえる五作品が大正十五年六月の「青

空」(第二巻第六号)に発表されていたことになる。

その後、北川冬彦の詩集『検温器と花』から「秋は豊かなる故」

「豚」「椿」が大正十五年十二月の「青空」(第二巻第十二号)に掲

載され、三好達治も「詩集検温器と花」と題して、北川の詩集の書

評を書き、「前途を期待し祝福する⁽⁸⁾」と同人参加を歓迎している。

このころ三好達治自身、「雑誌『青空』『権の木』等に、月月作品を

発表してゐるうち、当時私達の踏襲してゐた、所謂自由詩なるもの

の形式に多少疑問を抱きはじめてた。その形式が、第一私にとつては、

魅力の乏しいものとなつた⁽⁹⁾」というように、この号に「黒い旗」と

いう散文詩を掲載し、その後、短詩や散文詩を発表していった。つ

まり、「乳母車」は、詩風が変わる前の初期の作品として考えるこ

とができる。

「乳母車」は、百田宗治によって「日本詩人」の「青椅子 良詩

推薦」に取り上げられた。この「日本詩人」では、新人の作品紹介

が盛んに行われていたのである。このなかで、「三好君の詩は久保

君のに較べると、ずつと芸術的である、こゝでは感覚がその内部感

情とびつたり滲み合つてゐる、一つの世界をつくつてゐる、そして

その表現も非常に巧緻だ、巧緻だがさういふ巧みに伴ふイヤなも

のがちつともない、底になつてゐるものが真情である故である⁽¹⁰⁾」と、

高い評価を得た。だが、「日本詩人」について、三好達治は「その

頃私の住んでゐた京都の町で、普通書店に出でゐた詩誌は、『日本

詩人』『詩聖』の両誌を代表的のものとして、概ね両者に似通つた

二二三のものがなほ他にもあつたやうである。私は月月それらの雑誌

を熟読した」と述べる一方、「当時それらの雑誌に掲載されてゐた作品は、所謂民衆詩人の常識性冗舌詩、日常生活報告詩風のものが多く、自由詩運動末期の、想像力の枯渇した、気魄の乏しいものみだつた」と、批判する態度も見せている。また、浅見淵は「この詩とか、『乳母車』『少年』とかいった『青空』誌上に載つた三好君の詩を、ぼくはいまだに印象深く覚えてゐる。そして、こんなうまい詩が、どうして評判にならぬかと当時訝しんだものである。あとになつて考えてみると、当時は新潮社から出ていた『日本詩人』を中心とする未曾有の詩の全盛時代が漸く過ぎ、プロレタリア文学の興隆と相俟つて、プロレタリア詩がしだいに勢を得つつあつた時代だつたのだ」と述べている。

結局、昭和五年十二月に第一書房から『測量船』が刊行された後、堀口大学が『測量船』が三好達治君の処女詩集だと聞いたら、何人も吃驚するだらう。この有名な詩人に、今日まで詩集がなかつたのだと知つて。予告された『今日の詩人叢書』十冊の中で、一番詩の愛好者から期待されてゐたのも実に『測量船』だつた」と述べているように世間から評価されることになる。「青空」に掲載された作品は、詩二十六篇、俳句二首、短歌六首である。そのうち、「乳母車」「整の上」「少年」「笏」「雪」「街」「春」「村」の八篇が『測量船』に収録された。このなかの「乳母車」には、「時はたそがれ」

「夕陽」という夕暮れ時が詩世界の舞台として描かれている。このことが詩において、どのような役割りを果たしているか、また三好達治の郷愁がどのように表現されているかを考察していく。

一

「乳母車」は四連から構成されている。第一連、第四連は現在、第二連、第三連は過去の詩世界として考えていく。

母よ——

淡くかなしきものふるなり

紫陽花いろのものふるなり

はてしなき並樹のかけを

そうそうと風のふくなり

第一連は、「母よ」という呼びかけから始まる。この母に対し、「淡くかなしきものふるなり／紫陽花いろのものふるなり」とあるが、この部分について、三好達治は後に自ら述べている。

現実は何を指すのでもなく、さういふ色合をただ言葉の上でなすつておく、それで、夢のやうな乳母車が登場する、幻覚めいた場景に、なにほどか支へが準備されるのである、と位に答へる外はないが、こんな説明を加へたのでは、たいへん味気ないのを感じる。もうそこから、「詩」ははじまつてゐるのである

から、それが、ただ前置きであつては、やはりどこやらそれではつまらないのである。無条件に、言葉を言葉のまま、感覚的对象として受けとつてもらひたい、——一種の放心状態で、とてもつけ加へておかうか。⁽¹⁴⁾

つまり、「淡くかなしきもの」「紫陽花いろのもの」とは、「感覚的对象」なのである。また、次のようにも述べている。

詩は、ただ言葉の都合で、そのみで、そこから組立てられてゐる。創作だから作り出されてゐるものと、受けとつてもらひたい。

そこに含蓄されてゐる、すべての感覚的内容、視覚的要素、心理的表象、ないし気分、ムード、言葉の連続もつれあひに従つて生ずる進行する情緒、それらは、この一まとめの構造（——作品）に直接的に關してゐる限り、右のやうにまつたくの架空の上に立つ。⁽¹⁵⁾

「感覚的对象」とは、感覚を引き起こすために創作された言葉である。淡いかなしき、紫陽花の色合いという感覚として受け取るものである。村上菊一郎は「淡くかなしきもの、紫陽花いろのもの」といふのは、降りしきる落葉のことであり、或いはまた、忍びよる薄暮の水色の霽開気のことかも知れない⁽¹⁶⁾と述べ、そして阪本越郎は「淡くかなしきもの」「紫陽花いろのもの」は秋の夕方の薄明らしい

空気の色合であらう⁽¹⁷⁾と、両氏とも実際の景色を想定している。だが、松原勉が、「ふる」は「降る」とも「経る」とも限定できない⁽¹⁸⁾と指摘するように、この詩世界において「ふる」は二重の意味を持つと考えられる。「ふる」が「降る」ということのみであれば、村上菊一郎や阪本越郎のような想定も成り立つが、「経る」が過去から現在へという時間の流れであることから、過去に受けた感覚的なものが続いていると考えられる。また、時間が経つたということから、第一連は現在の「私」が描かれている。

そして、「はてしなき並樹のかげを／そうそうと風のふくなり」とあるが、「はてしなき並樹」は第四連の「この道は遠く遠くはてしない道」の伏線となつていふと考えられる。

時はたそがれ

母よ 私の乳母車を押せ

泣きぬれる夕陽にむかつて

隣々と私の乳母車を押せ

第二連では、「私の乳母車」とあることから、それは「私」の幼児期であり、過去の詩世界である。ここでは、「時はたそがれ」といふ夕暮れ時に幼少期の「私」が存在している。同時に、第一連の現在の「私」が第二連で過去を振り返っているという視点もある。他の詩篇を見てみると、

僕は今日、春浅い流れに沿って、並樹の影を歩いたのだ、空は曇つてゐた、僕は、野景に、遠い畑や火見槽を眺めたのだ、森の梢に鶉が光つて飛んでゐた。風に、高壓線が鳴つてゐた。

それから、いろいろの悲しい憧憬が、僕に、僕の頬に、少し涙を流したのだ、僕は、僕は疲れて帰つて来たのだ、僕はもう追憶の行衛を知らない、友よ、春が来た、君らの歌を歌つて呉れ、君らの歌の、やさしい歌の悲哀で、僕の悲哀を慰めて呉れ。

（「僕は」、昭4・5）⁽¹⁹⁾

と、「追憶の行衛」を知ろうとしたとき、涙を流している「僕」が存在するのである。よつて、「乳母車」第二連の「泣きぬれる夕陽」とは、まるで泣いているような夕陽でもあるが、過去を振り返り涙を流している現在の「私」とも考えられる。また、この詩世界に存在する幼少期の「私」が涙を流しながら夕陽を見ているのである。つまりこの連では、過去と現在の「私」の二つの視点が重なつていると考えられる。

ここで、三好達治の生い立ちを考えると、六歳のとき、京都府舞鶴町のS家に一時養子として貰われたが、長男ということもあり、結局兵庫県の祖父母のもとに引き取られ十一歳まで暮らしている。⁽²⁰⁾後に、三好達治はS家に一時養子として貰われていったときのことを

自伝的小説「暮春記」（昭11・6）に、

さうして私の眼には、私の身のまはり、私の棲居や家族の者が、私にとつて魅力もなく希望もない、退屈なもの、つまらないもの、変によそよしいものに思へた。眼の前の父の顔も、何か間遠いものに見えた。今のさきまで一緒に遊んでゐた兄弟達も、たまたま路傍で邂ぐり会つた半日の遊びの友達、そんな風なものとしか思へなかつた。母もやはり私の心を惹かなかつた。（中略）もともと私には、家庭を愛するやさしい感情、家庭に親しむ温かい気持、そんなものが欠けてゐたとでもいふのだから。⁽²¹⁾

と書いている。また、高校時代の同級生である丸山薫は、
時にはまたその生家の事情についての訴えもきかされた。帰つてこない父の事やいつもさびしい母の事、不遇の中に苦闘して遠く海外への移住を計画しているという弟の事など。それらの訴えや嘆きには、こうした不運な家庭の長子としての肉身への愛情と氣遣いに首を締めつけられながら空漠とした前途に立ち向う青年の、切実な苦衷や寂寥がうかがわれた。過去を失策だつたという悔恨もこの場合には生きて、充分に同情されるものがあった。けれどこうした訴えもまたどこかで、生い立ちへの郷愁がその心情を救つているように感じられた。⁽²²⁾

と述べており、これらから三好達治は家庭での愛情に餓えていたと

推察され、「母よ」という呼びかけも、悲痛なものとなつてくるのである。

だが、この過去の詩世界がそのまま三好達治の過去と重なるとはいえない。なぜなら、「詩は歴史的叙述にふれようとするのでないから、ある時に『乳母車』を借りたやうなぐあひに、背景史跡は、これを一時の借り物として、ここでの『場所』には何も重みをかけて受ける要はないのである」と三好達治が述べているように、乳母車は借り物である。よつて、乳母車を押すという行為も母から子への愛情を示す一般的な行為となり、母という存在も抽象的な存在となる。関良一が、「『乳母車』の、『母よ』という呼びかけは、もちろん、詩の中の『母』への呼びかけであり、『母』は、永遠に母性的なるものであるかも知れないし、何人にも普遍的な郷愁の対象であるかも知れない。しかし、三好の場合、『母よ』という呼びかけには、それなりの裏づけがあり、切なさがあり、それが、ゆえ知らず、読者にも伝わつて来るのではないか。そこに『真情』が感じ取られるのではないか」と述べているように、「押せ」という要求に三好達治の母への願望が託されている。

赤い絵のある天鷲絨の帽子を

つめたき額にかむらせよ

旅いそぐ鳥の列にも

季節は空を渡るなり

第三連でも、「赤い絵のある天鷲絨の帽子」ということから、第二連から引き続き過去の詩世界が続いている。ここでも、帽子をかむらせるといふ一般的行為に、「かむらせよ」と要求しており、母を恋う思いは変わらない。

また、三好行雄・越智治雄・野村喬は、「旅いそぐ鳥の列にも／季節は空を渡るなり」が、一種の形容倒置であるにもかかわらず、かえつて、『季節』が印象されるのは、あきらかに時間の隔絶というより、充填不能の、回復しえぬ時間の推移が意識されているからである」と「時間の推移」を重視しているように、季節の流れは、過去から現在へという時間の経過に通じる。また、第二連の「夕陽にむかつて」からここでの「空」へと移行する描写は、子どものころの「私」の視線の変化が、涙をこらえる行為を表しているとともに、読者の視線の変化を誘っている。どちらも場面の切り替えを暗示していると考えられる。

淡くかなしきものものふる

紫陽花いろのものものふる道

母よ 私は知つてゐる

この道は遠く遠くはてしない道

第四連では、再び現在の「私」からの視点に戻る。「淡くかなし

きもの」「紫陽花いろのもの」は同列の意味であり、紫陽花の花の淡い色合いが、母という存在の遠さであり、不確かさという感覺的なかなしさを表現している。よって、これらが「ふる」とは、母からの愛情に飢えていた幼少期の思い出のことである。母を求める思ひは、過去から現在へ変わらずに時間を経て、現在の「私」の思ひ出として引き起こされるのである。また、次の詩篇を見てみる。

街ではよく彼の顔が母に肖てあるといつて人々がわらつた。釣針のやうに脊なかをまげて、母はどちらの方角へ、点々と、その足跡をつづけていつたのか。夕暮に浮ぶ白い道のうへを、その遠くへ彼は高い声で母を呼んでゐた。(「訝」、昭2・3)⁽²⁶⁾

やがて夜が来たとき、満潮に吞まれる珊瑚礁のやうに、暗黒と沈黙の壓力の中に、どんなに暗く、この街は溺れさり沈みさるのであらうか。そしてその中で、どんな形の器にどのやうな灯火がともされるのであらうか。もしくは灯火の用とともないのであらうか。私はそれを知らない。今も私は、時として追憶の峠に立つて、遠くにこの街を眺めるのであるが、私の記憶は、いつも、太陽の沈む方へと、いそいで帰つてしまふのである。

(「街」、昭2・5)⁽²⁷⁾

これらの詩には、「白い道のうへ」「追憶の峠」という表現が使わ

れている。どちらも「道」に立つ私が存在している。つまり、ここでの「道」とは、現在の「私」を起点として過去へと向かう郷愁の道なのである。それはそのまま「この道は遠く遠くはてしない道」となる。故郷の遠さは、母の存在の遠さでもある。

三

こうした郷愁を感じさせる詩は、三好達治の初期の作品に多く見られる。そこで、幼少期の記憶に関して注目したいのは、記憶として残っている情景の時間帯である。

いつじぶんのことであつたか、学校へ上るよりはずつと以前、四五歳の頃に見た夕空の記憶があります。私の最も古い記憶の一つ、この齢となつてみると、もう人ごとのやうな感じもします。(中略)私の育つた大阪の空にも、まだその頃は、夕暮れになると無数の鴉が東の空に帰つてゆくのが見られました。鍵になり棹になりする雁行の見られることもありました。そんなものをばんやり眺めてゐるときに、私は一種の安息を覚えたのを忘れません。⁽²⁸⁾

夕暮れは、三好達治が持つ最も古い記憶のひとつであり、安息の時であつた。「暮春記」においても、「それはある盛夏の頃の、夕暮のことであつた」という文章から養子となる相談が始まる場面が描

【表】

	朝	昼	午後	夕方	夜
『測量船』	2 (5.3)	0 (0)	2 (5.3)	10 (26.3)	3 (7.9)
『測量船』拾遺	1 (1.9)	1 (1.9)	2 (3.8)	13 (24.5)	5 (9.4)
合計	3 (3.3)	1 (1.1)	4 (4.4)	23 (25.3)	8 (8.8)

〔注〕()は詩篇数を表している。また、()の中は()の詩篇数における時間帯ごとの割合を示したもので、小数点第四位を四捨五入した数値である。単位は%で表記した。なお、各時間帯においては、一日すべてが描かれている詩篇及び詩の時間としての設定がはっきりしないものは数値に入れていない。また、朝、昼、夕方、夜は時間帯の区分であって、詩句の表現とは必ずしも一致しない。表中の『測量船』及び『測量船』拾遺は『三好達治全集』第一巻(昭和39・10・15、筑摩書房)に拠った。

かれている。また、祖母の家に引き取られていくときの思い出では、「ただ私の記憶にあるのは、その町の、小さな停車場の人ごみの中で、もう一度その使ひの者を、私達が見つけ出した、——夕暮前の、そんな風景だけである」と書かれている。

このように、幼少期を振り返るとき、そこには「夕暮」「夜空」という空間が存在している。「乳母車」にも「時はたそがれ」「夕陽」という時刻が過去の記憶とともに描かれている。【表】は、三好達治の第一詩集『測量船』と『測量船』拾遺における詩世界における時間を調べたものである。【表】参照)

この表から、初期作品において夕方の時間帯が他の時間帯よりも

多いことがわかる。さらに、『測量船』に掲載されている作品から、夕方の時刻が設定されているものを見ていく。

夕ぐれ

とある精舎の門から

美しい少年が帰つてくる

暮れやすい一日に

てまりをなげ

空高くてまりをなげ

なほも遊びながら帰つてくる

閑静な街の

人も樹も色をしづめて

空は夢のやうに流れてゐる(「少年」、大15・8)

しづかに彼の耳に聞えてきたのは、それは銜になつた彼の叫声であつたのか、または遠くで、母がその母を呼んでゐる叫声であつたのか。

夕暮が四方に罩め、青い雲が地平に垂れてゐた。(「銜」、昭2・3)

「少年」では、「夕ぐれ」時、「とある精舎の門から」帰ってくる
「美しい少年」を囲む情景は、「人も樹も色をしづめ」、「空は夢のや
うに流れてゐる」とあり、読者の視覚に訴え、イメージを想起させ
る。「色をしづめ」の「色」もはっきりはせず、「夢のやうに」とい
う「夢」もはっきりと書かれていない。これは、「乳母車」の第一
連の「淡くかなしきものふるなり／紫陽花いろのものものふるな
り」という感覚を呼び起こす詩句と通じるものがある。「餌」の
「高い声」は幼少の子供を意味し、しきりに「母」を呼んでいる。
これも「乳母車」の「母よ」という呼びかけを想起させる。

——毎日こんなにいいお天気だけれど、もうそろそろ私たち
の出発も近づいた。午後の風は胸に冷めたいし、この頃の日く
れの早さは、まるで空の遠くから切ない網を撒かれるやうだ。

夕暮の林から蝸が、あの鋭い唱歌でかなかなかなと歌ふの
を聞いてみると、私は自分の居る場所が解らなくなつてなぜか
涙が湧いてくる。(「燕」、昭3・9)⁽³³⁾

夕暮は子供らの遊びほはける時、女らの化粧を嗜む時。

夕暮の坂で餌を呼んでゐる一人の少年。

a a i……………

a a i…………… (「ある日」、昭2・1)⁽³⁴⁾

「燕」では、「午後の風は胸に冷めた」さを感じ、「夕暮」という
時間の設定の中で、「自分の居る場所」が解らなくなり、涙を流し
ている。夕暮れのなかで泣いている姿は「乳母車」第二連の現在の
「私」の視点と重なる。また、「ある日」では、夕暮れの中での子供
が「遊びほほけ」ており、「餌を呼んでゐる一人の少年」の姿は、
「餌」の母を呼ぶ高い声、ひいては「乳母車」の母への呼びかけに
通じる。これらの詩の背景として、「夕暮れ」が設定されているの
である。三好達治にとって「夕暮れ」という時間は幼少期の寂寥感
と重なると考えられる。

三好行雄・越智治雄・野村喬は、「乳母車」が幼時思慕篇である
ことは否みがたいとしても、詩人の現在における烈しき飢渴の抒情
によつて成立し得たことが窺い得るであろう。幼年期の過去におい
て詩人が満たされ得なかつたことは、現在の時点にあつてなお消え
ずに充足すべきこととして意識にのぼりつづけ、やがて認識を招き
よせるのである。⁽³⁵⁾と作者の実体験に基づくものと指摘している。一
方、松原勉は『乳母車』という作品の主題は、母なるものへの郷
愁、または幼児期への郷愁である。その郷愁は、現実ないし日常性
につながる時間・空間にあるものではなく、また詩人三好達治に直
接かわるものとも言えないであろう。『淡くかなしきもの』がふ
り、『紫陽花いろのもの』がふる時空に存在する郷愁であり、純粹

に仮構された郷愁なるものと言ひ換え得るであろう。それは日常性を剥脱した観念的な性格を持つものである」と、詩と作者を切り離して考えている。

「乳母車」は、三好達治が過去に母の不在によりかなえられなかった「乳母車を押せ」や「赤い総のある天鷲絨の帽子を」「かむらせよ」という願望をそのまま描いているわけではない。なぜなら、詩のなかの「乳母車」や「赤い総のある天鷲絨の帽子」は借り物であり、乳母車を押すことも帽子をかむらせることも母から子への一般的行為となるからである。だが、「詩は、『真実』を『嘘』のやうに書くものだよ、と萩原朔太郎先生はある時いはれたが、『嘘』に於ての『真実』は、作者に於て最も語りにくいものである」と三好達治が述べているように、「乳母車」の詩世界は全くの虚構ではない。幼少期に、夕暮れという時間の中なかで感じた寂しさや養子となつた体験は三好達治によるものであり、母の存在の不確かさや故郷の遠さに対する郷愁までもが仮構されたものではない。三好達治の郷愁とは、幼少期の寂寥感が夕暮れという時刻と重なり、母に對して満たされなかつた愛情を過去の詩世界の中で求めようとするものである。

注

- (1) 紅野敏郎「青空」解説（小田切進編「青空」復刻版別冊）所収、7頁、昭45・6・15、日本近代文学館
- (2) 中谷孝雄「青空」（「群像」24巻5号、昭44・5）。中谷孝雄は「青空」を書くにあたり、「大正末年から昭和初年にかけて如何に多くの同人雑誌が水の泡のやうにかつ消えかつ結んで巷に氾濫したことか。『青空』もさういふ同人雑誌の一つに過ぎなかつた。こんなふうになが、私が故意に『青空』を軽視してゐるかのやうに見えるかも知れないが、事実この雑誌が昭和二年六月、通巻二十八号を以つて休刊——事実上廃刊した時、同人は十四人ゐたが、まだ一人の作家も詩人も世に出てはゐなかつたのである」と述べている。
- (3) 中谷孝雄は「三好君の印象」（「青空」2巻6号、大15・6）において、「四月の末日、僕は、青空同人会の席で、初めて三好君を紹介された。その日から、彼は我々の同人として、青空に入った」と書いている。
- (4) 注(2)に同じ。
- (5) 淀野隆三「編集後記」（「青空」2巻6号、大15・6）には、「三好達治及び彼の詩を紹介する」と明記されている。
- (6) 注(3)に同じ。
- (7) 三好達治「詩壇十年記」（「若草」昭12・5）。全集第九巻231、234頁。
- (8) 三好達治「詩集」検温器と花」（「青空」2巻12号、大15・12）。全集第十一巻78頁。
- (9) 注(7)に同じ。全集第九巻236頁。
- (10) 百田宗治「青椅子、良詩推薦」（「日本詩人」6巻7号、大15・7）。本文中の「久保君の」とは、久保格「母と子供」（「緑林」大15・6）を指す。

- (11) 注7)に同じ。全集第九卷288頁。291頁。
- (12) 浅見淵「三好達治とその周辺」(村上菊一郎編『近代文学鑑賞講座 第二十卷 三好達治・草野心平』所収、163頁、昭34・2・25、角川書店)。本文中の「この詩」とは、「祖母」(「青空」2巻6号、大15・6)を指す。同じく「少年」も「青空」(2巻8号、大15・8)に掲載された作品である。
- (13) 堀口大学「三好達治君の『測量船』——書いたま、出し忘れた昭和六年春の文——」(『作品』4巻1号 昭和8・1)
- (14) 三好達治「髪のうちへ」(『國文學解釋と鑑賞』初夏の臨時増刊号 26巻8号、昭36・6)。全集第六卷290頁。291頁。
- (15) 注14)に同じ。全集第六卷287頁。
- (16) 村上菊一郎「三好達治本文及び作品鑑賞」(村上菊一郎編『近代文学鑑賞講座 第二十卷 三好達治・草野心平』所収、18頁、昭34・2・25、角川書店)
- (17) 阪本越郎「測量船」(『日本の詩歌 第二十二卷 三好達治』所収、8頁、昭42・12・15、中央公論社)
- (18) 松原勉「三好達治『測量船』考——空間・時間の特質について——」(『広島女学院大学国語・国文学誌』21号、平3・12)
- (19) 三好達治「僕は」(『文藝レビュー』、昭4・5)。全集第一卷41頁。「測量船」に収録された作品を初期作品として考えているので、「青空」掲載作品のみに限定せず、この作品を参考とした。以下の引用も同じ。
- (20) この年譜は、石原八束編「三好達治年譜」(『三好達治全集 第十二巻』所収、629頁、昭41・11・1、筑摩書房)に拠った。
- (21) 三好達治「暮春記」(『改造』18巻6号、昭11・6)。全集第九卷18頁。
- (22) 丸山薫「その頃の三好君」(詩人のネガフィルムとして) (村上菊

- 一郎編『近代文学鑑賞講座 第二十卷 三好達治・草野心平』所収、157頁、昭34・2・25、角川書店)
- (23) 注14)に同じ。全集第六卷296頁。
- (24) 関良一「三好達治『乳母車』」(『國文學解釋と教材の研究』10巻11号、昭40・9)
- (25) 三好行雄・越智治雄・野村喬「測量船(1)——三好達治——」(『國文學解釋と教材の研究』13巻5号、昭43・4)。この考察は三人の論議に基づいているため、連名で記すこととする。
- (26) 三好達治「罅」(「青空」3巻3号、昭2・3)。全集第一卷11頁。
- (27) 三好達治「街」(「青空」3巻5号、昭2・5)。全集第一卷17頁。
- (28) 三好達治「魂の遍歴」(『講座 現代倫理 第八巻』所収、172頁、昭33・5・20、筑摩書房)。全集第九卷286頁。289頁。
- (29) 注21)に同じ。全集第九卷11頁。
- (30) 注21)に同じ。全集第九卷22頁。23頁。
- (31) 三好達治「少年」(「青空」2巻8号、大15・8)。全集第一卷10頁。
- (32) 注26)に同じ。全集第一卷11頁。
- (33) 三好達治「燕」(『詩と詩論』第1冊、昭3・9)。全集第一卷42頁。
- (34) 三好達治「ある日」(『椎の木』2巻2号、昭2・3)。全集第一卷89頁。
- (35) 注25)に同じ。
- (36) 注18)に同じ。
- (37) 注15)に同じ。全集第六卷291頁。
- 〔付記〕 本稿で引用した三好達治の文章は、『三好達治全集』全第十二巻(昭39・10・15頁、昭41・11・1、筑摩書房)を底本とし、本文では全集と略記した。なお、引用に際しては、新漢字に改め、強調記号は省略した。